空想少女

栗栖憲治

妾はこのごろ自分を忘れて
空想する事が多くなりました
そんなとりとめのない空想でも
文字にかえると
あんがいすてきな物語になります
しかし家の者は
妾が空想にひたる事を
禁止する
だから――
文筆家になりたい妾は
いつもいらいらしていた

ひさしぶりの外出であれば
妾は自分の空想癖を
おさえる事ができません

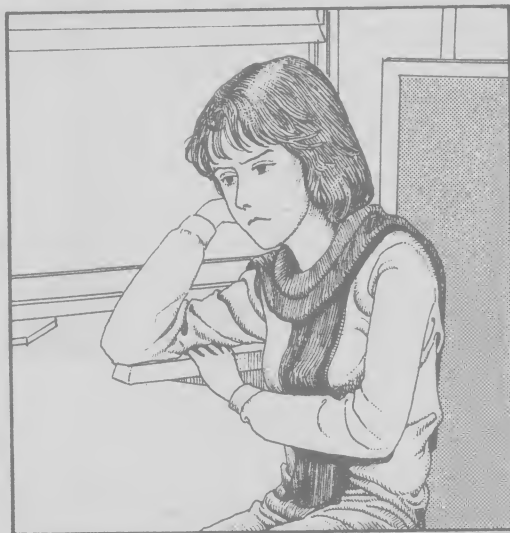
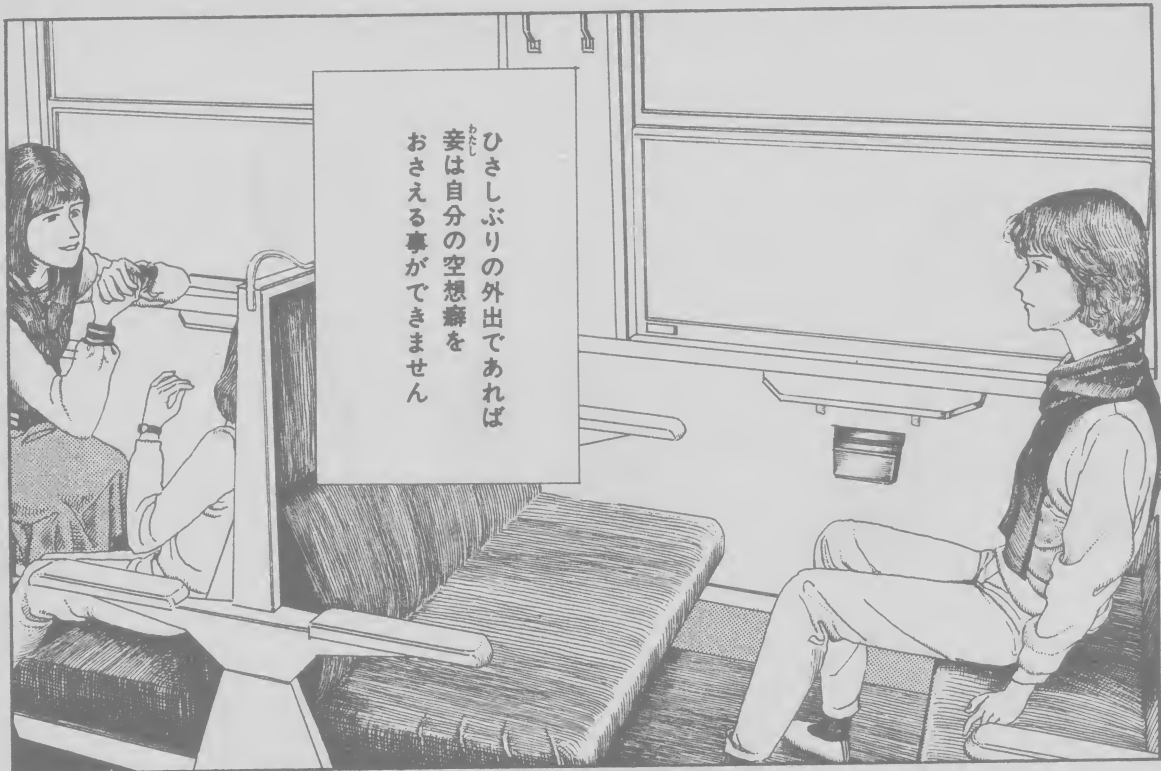
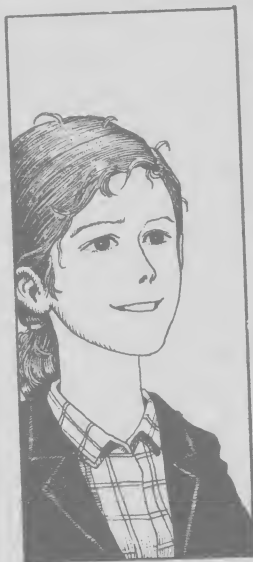
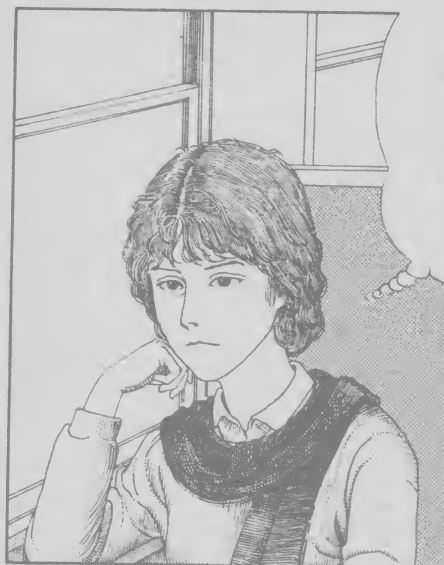
ほらほらプラットホームの
ふたり――
何やら話している様子
妾はすかさず空想してみる

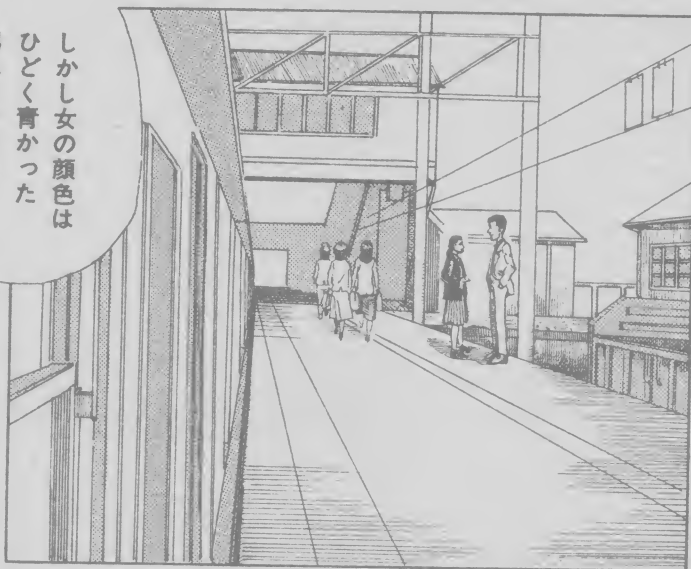
気分でも悪いのか?
顔色が悪い
ようだが……

ううん………
なんともない…
その青い
サングラスの
せいよ

サングラス?
そうかな――

それに
服が…
黒だから

本当だ
サングラスの
せいだった
バカだな
オレ

しかし女の顔色は
ひどく青かった
男はうそつき

女の命は残り少ない――
始めが美しくてたのしい
ストーリィにすれば
後半の女の死がより
悲しくなる――

神様お願いです
どうか妾をお救い
下さい
どうか戸を開けて
下さい

そんな時神はきっぱりと
こう言うのだ
『お前たちがどこの者か
知らない――云々』
救いもとめる者
ひとりではない――

あれはルカの
13の27だったかしら?

!

あの女の子……
A子には好きな人がいた
ほれられた男はBという
A子はBについてなにも知らない
それなのに胸をこがすほどに
好きになった

Bの名前を知らぬのに
Bの物の考え方も知らぬのに
……どうして好きになれるの
だろうと
A子は自分をからかってみる……
ゴトン ガタン ゴトン
ゴトンガタン
A子は思う………
私が好きな物すべて
私の思想の全部だ
——と

変やがてA子の思想の
全部がやって来る——
あっ

つまり
Bである

Aは急いで
それらの感情を
心の奥にしまい
隠そうと努力する
ああー神よ
この空席に座らず
素通りします
ように——

AはBの姿を
見たくて
たまらなかったが
どうしても
顔をそちらに
向ける勇気がない

ただAの視野の端に
ぼんやりとしたBの影が
あるばかり………
ガタン…
ゴトン
ガタン

Bの存在はAに動揺
をあたえる――
心臓のはく動はむやみに
増加し消化器は朝食の
パンを持てあました
コホン

ガタン ゴトン ガタン…

ガタン
ゴトン
ガタン

ねえ――
どうだった――

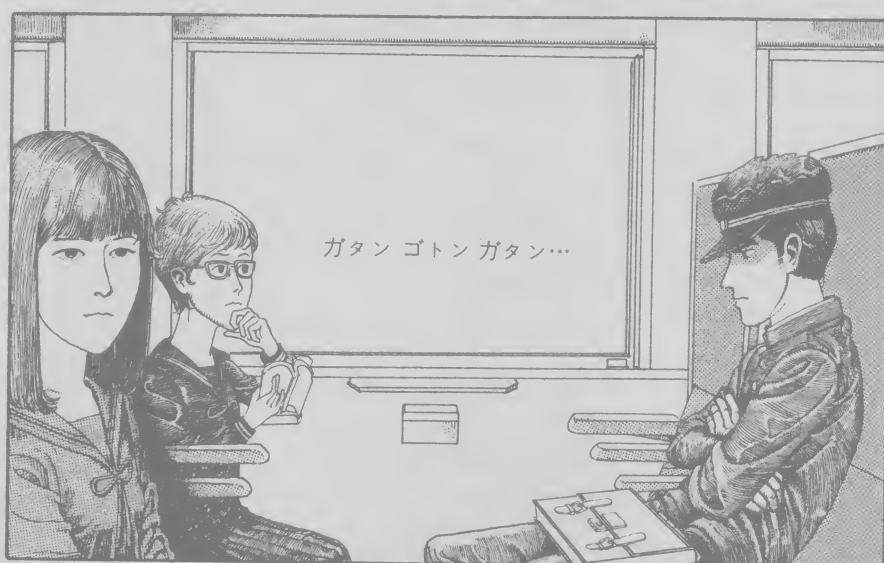
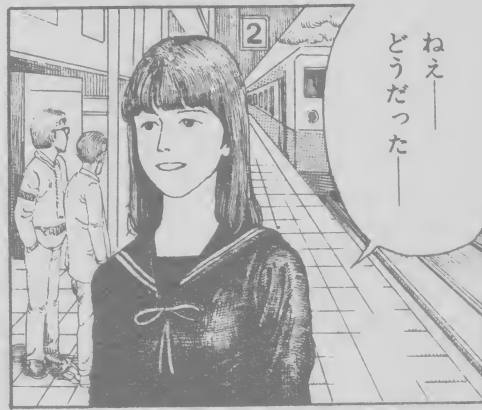
まゆを
ひそめて…
なんだかおこって
いるみたいだった

それでもね…
少しあなたを見ていたよ
天井の広告を見て
外の景色を見ようとした時
確かにあなたを見た

トン
君!!
脈はありますよ
この――

もういいの
どうして?
せっかく
あたしが
――

私考えすぎる
性格でしょう
それに心も
丈夫じゃないしさ

うまくいかないよ――
つき合うようになっても
思っていることが
云えないよ わたし

あたし あんまりあの人が好きだから話す時きっと心臓がドキドキして…

顔は人が見て気の毒がるほどひきつってしまう

軽蔑されないか嫌われないかと毎日々々気にしてたらあたし 気が変になるよ

ふーん

そんなものかねー

あたし刺激の強い事は嫌いなの
?

ねえー
え?

あの子のお母さんや姉妹はあの子と話す時ドキドキしないのかしら?

ブツブツ
しかしBはBを観察していたメガネ少女を好きになるのだ

自分に好意を
持っていると
感ちがいして—

ブツ
ブツ

!

あいつは
殺人狂だ——
いつも人殺しの
方法を考えている

今日も一人の女を
殺している —わたしには
ちゃんとわかるんだからね
ねえ——
う—ん
なんだあ—

あなた
一年前どういったか
覚えていますか?

後一年
漫画を書かしてくれ
それでも売れなかったら
他の仕事につくからって
あなたはいいました

おねがいです
漫画かくの
やめて下さい

男は漫画をかきつづけていきたかった
それしか道はないと思った
あなたは
漫画には
むかない
のです
突然の妻のことばは
小心の男を深くキズつけた

一歩一歩自分を侵害する者の
足音が男の耳には聞えるらしく——

その時男の精神は
正常でなかった——

コトッ
あ
ガタッ

男は心の中で叫んだ
「この女さえ
いなければいいんだ」

う――っ
ドクドクドク

ガ
タンガタン

な
なにするの!

ガタンッ

はっ
はっ
はっ
はっ
はっ
は
はっ
はあっ

ガタンガ
タン

?

ガタン ガッタン ガタン ガッタン
34
NSS
おっ!! なんだ なんだ
あ
ザッ

悪事を働く者 地獄へ帰れ!!

おい—— 殺人狂!! お前のした事 みんなわかってるんだ お前は 狂っている!!
ザッ

ガタン ガッタン ガタン
19A
なんだい ありゃ!?
精神 異常よ!?
タッタッ

ちっ!!
クルッ

ヒソヒソ ヒソヒソ
ガヤガヤ
俺は はなっから 変な娘だと 気づいていた よ
ひとりごと 言ってるんだもの ねえ——

あんただって よく ひとりごと 言うじゃないの

そうだそうだ おかしくもないのに 急に笑い出したり…
思春期の娘は みんな精神異常 だと思ってれば まちがいねえのだ
そんなぁ— ひーどい ねえ——
だから よ——
気を つかってるのよ 君らにね—
馬鹿あ— はははは はははは ははふふ—

プァーン
ゴトン ゴトン ゴトン

カンカンッ

あっ
おかえり
なさい
バタン

どう
でした?
ガチャ
カチャ

だめ…
だったのね
バサッ

気にする事
ありません
今にきっと
売れますから

あらあら
くつが
あんな所
に
ふうーっ

犯罪もの
じゃなくてね

ユーモアのある
楽しいものを
かいたら…

殺人トリック
ばかり考えてたら
頭がおかしく
なるんじゃないの?

そんな
あなたを
見てたらね——
ジャアッ
あなたに
殺されるのでは
ないかと時々
怖くなるの
ぶっ!!
ゴホンゴホン
馬鹿言うな
変な事を考えるな
今日だってお前
電車の中で——
どう…
なってるだ
お前は—
サッ
うん——
妾にも
わからないの
自分の魂がなくなってね
たとえばコップを見ていたら
妾はコップになるし 花にも
犬にもなるの—そしてね
雲にもね…
妾 いつも空想しています
家の者が禁止しても自分の魂が
どこへいこうと妾空想しています

END